報告　四

演じる武芸、物語る身体―武芸・芸能・武戯

岡﨑　由美

一、はじめに―民間の武芸と芸能

「武人・武官と文学」というテーマのもと、本論者が担当したのは、「武芸」のパフォーマンス性を端緒として、演じ手としての武芸者の非言語的な身体が、武術と芸能、大道芸と演劇の境界において、どのように物語の流通に組み込まれていくか、を考えることである。

武芸の立ち回りが見世物芸の一種として演じられることは、改めて言うまでもないであろう。ここで漢代の百戯にまで遡ることはしないが、近世で良く知られた例を挙げると、宋・周密『武林舊事』巻之三「社會」に、廟会に「百戯競集」した様を記すに、雑劇、唱賺、小説、影戯といった芸能に混じって、角觝社相撲、標社射弩、英畧社使棒といった武術集団が含まれており、大道武芸の盛んなありさまが見て取れる。[一] 明・田汝成撰『西湖遊覧志餘』巻二十にも、清明節の杭州における墓参りを兼ねた遊山の賑わいに、「走索（綱渡り）、驃騎（曲馬）、飛錢（投げ銭）、抛鈸（皿回し）、踢木（足芸の樽回しの類）、撒沙（砂絵描き）、呑刀（刀呑み）、吐火（火吹き）、躍圈（輪くぐり）、觔斗（トンボ返り）、舞盤及諸色禽蟲之戯」など露天芸人が、稼ぎ時とばかりに集まった。[二] このうち、「驃騎」は軍隊の練武場での演武とも密接な関わりがあるが、それは後述する。

こうした大道武芸の様相は、『水滸傳』の売薬の大道武芸者、打虎将李忠をはじめ、明清小説の描写にもよく見られる。武人が習い覚えた武芸を大道で披露して日銭を稼ぐ[三]といった場面である。清代の小説『緑牡丹』では、女武芸者がドサ廻りの娘軽業に身をやつし、婿探しの旅に出る。[五] これら小説の描写は、フィクションではあるけれども、民間の武芸が軽業などの見世物芸と不可分のイメージを共有していたことはうかがえよう。

また、明・宋濂撰『元史』巻一百五「刑法志四」第五十三の記載には、民間の正業につかぬ不逞の輩を取り締まる条として、卑猥な内容で聴衆を惑わす「詞話」「雑戯」の類、蛇使いや傀儡などで人を惑わし、偽薬を売りつける輩と並んで、「習用角觝之戯、學攻刺

之術者」も禁令の対象となっている。[六] 即ち、これは逆説的に多様な大道芸の流行を示すものであると共に、お上からすれば、民間で武芸を習う者などは正業につかず、大道芸人と同様、社会の風紀と安寧を乱す連中と一括りに見なされていたということであろう。

とはいえ、これらの技芸自体は、当然民間だけのものではなかった。民間の「雑戯」を禁じた元代でも、朝廷の教坊では「承応戯」として、軽業や手品の類が演じられた。明・王圻撰『續文獻通考』巻一百六十「樂考」に言う。

元立教坊司、掌天下妓樂。有駕前承應雜戯、飛竿・走索・踢弄・藏擫等伎。

元は教坊司を立て、天下の妓楽を掌握した。皇帝の御前での承応雑技に「飛竿（竿軽業）」「走索（綱渡り）」「踢弄（足芸軽業）」「藏擫（手品）」などがある。

それでは、武芸はどうであったか。民間では無頼扱いされようとも、軍隊に入ったり、貴顕の傭兵となれば、飯のタネになった。明・陳子龍輯『明經世文編』巻二十一「論政治疏備邊褒忠求賢」に「京師無賴之徒、多買快馬教習、以規厚利（都の無頼の徒は、多く駿馬を買って馬術を習うことで厚利を求めようとする）」とある。[七] そして、軍においても、「武」のパフォーマンス性が高く活かされる場があった。練兵場における閲兵式の演武である。

二、軍隊の演武と芸能

明代には各地に「教場（練兵と閲兵の場）」が設けられ、おりおり軍隊の威容を示すべく、演武が行なわれた。威容を示すものであるから、「見せる」パフォーマンス性を帯びるのは当然であろう。清・張岱撰『陶庵夢憶』巻四「兗州閲武」には、その有様が活写されているので、些か長くなるが、全文提示する。

辛未三月（崇禎四年、一六三一年）、余至兗州、見直指閲武。馬騎三千、步兵七千、軍容甚壯。馬蹄卒步、滔滔曠曠、眼與俱駛、猛掣始回。其陣法奇在變換、旛動而鼓、左抽右旋、疾若風雨。陣既成列、則進圖直指前、立一牌曰「某陣變某陣」。連變十餘陣、奇不在整齊而在便捷。扮敵人百餘騎、數里外煙塵坌起。迯卒五騎、小如黑子、頃刻馳至、入轅門報警。建大將旗鼓、出奇設伏。敵騎突至、一鼓成擒、俘獻中軍。内以姣童扮女三四十騎、荷旃被毳、繡袪雌結、馬上走解、顛倒横豎、借騎翻騰、柔如無骨。樂奏馬上、三弦・胡撥。琥珀詞・四上兒・密失・叉兒機・傑侏兜離・罔不畢集、在直指筵前供唱、北調淫俚、曲盡其妙。是年、參將羅某、北人、所扮者皆其歌童外宅、故極姣麗、恐易人爲之、未必能爾也。

辛未三月、私は兗州へ行き、直指使の閲兵を参観した。騎馬三千、歩兵七千、軍容は甚だ壮大である。馬が駆け歩兵が進むのは怒涛の勢い。視線もそれを追って走り、ぴたりと止まると戻る。その陣立は変幻自在で、軍旗と軍鼓の合図で、左により右に旋回し、風雨のように素早い。陣立てができると直指使の前に図面を献上し、「某陣変某陣」との札を立てる。立て続けに十余りの陣を組み替えた。素晴らしいのは整然としているこ

とではなく、敏捷であることだ。敵に扮した百余騎が、数里の彼方で砂煙を上げた。警邏兵五騎が豆粒のように小さく見えたところから、たちまち駆け戻り、幕営に警報する。大将の旗鼓のもと、奇計を以て兵を伏せた。敵騎が突っ込んでくるや、軍鼓一声、取り押さえ、捕虜として中軍に献上した。そのうち、女装の美少年三、四十騎が、背に旗を挿し毛皮の衣装をまとい、袖口に刺繍を施し、纏め髪を結った出で立ちで、馬上で曲乗りをする。逆立ちや横に身を倒し、馬を操ってトンボを切るさまは、骨がないかのように柔軟である。馬上に音楽を演奏し、三弦、胡撥、琥珀詞、四上兒、密失、叉兒機、傑休兜離と何でもござれで、直指使の宴席の前では歌を披露した。北方の俗曲で、妙味を尽くしている。この年、参将の羅某は北方人で、演じていたのは彼の歌童や家妓であったため、極めて艶麗であった。他の者に替えて演じても、このようにはできまい。

練兵場でまず披露されたのは、大規模な軍隊による変幻自在の陣立てである。いわばマス・ゲーム、集団演技である。次に行われたのは、一種の模擬戦闘である。敵に扮した百余騎が急襲するのを、探索兵がすばやく通報し、伏兵の奇計を以て一網打尽に捕虜とする、というシナリオである。さらには、女装の美少年三、四十騎が、馬上で「走解」即ち曲乗りを披露する。前述の『西湖遊覧志餘』に記された「驃騎」と同じ芸である。また馬上で様々な楽器を演奏し、直指の宴席の前では歌唱も披露する。こうなると、もはや芸能の域である。実際、彼らは参将羅某の「歌童」であって、歌舞音曲が本職であろう。美少年の曲馬音楽ショーは、直指使をもてなすための特別企画であったかもしれないが、明代は練兵場の選抜訓練に「吞刀走索之徒」即ち刀呑みや綱渡りといった大道芸人、軽業師を充てていたこともあり、演武の際にその伎芸を披露していたようである。[八] 軍隊はこうした民間の芸人や武人も取りこむ組織であり、練兵場では演武と演芸が混在して行われたのである。

このように、閲兵の演武とはいえ、「演じて」「見せる」パフォーマンス性は十分にあり、この記事の描写から連想されるものは、現在でも中国各地の歴史テーマパークで行われているアトラクションショーと大差がない。

練兵場で敵味方に扮しての模擬戦闘といえば、『北宋志傳』第六回に、胡延贇の武芸の腕前が見たいとの太宗の求めに応じて、八王が唐の御果園の故事に倣って天覧試合をすることを提案する場面がある。御果園の故事とは、尉遲恭が単雄信と戦って秦王（後の唐の太宗）を救った後、その様子を天覧試合として皇宮の御果園で再現演武したとの伝承による。『北宋志傳』では、胡延贇が尉遲恭に扮し、八王が秦王に扮し、教練使の許懐恩が単雄信に扮して行われる。[九] つまりこれは、配役のある演武であって、小説の描写としても隋唐故事とのイメージの共鳴を狙う劇中劇に近い。しかし、フィクションの描写といえども、その背後に練兵場や民間の廟会などでの、役に扮しての演武のパフォーマンスがあったことは、想像に難くない。

三、招式の共有

明代の小説の格闘場面には、「招式」即ち武技の型が多用される。

それらの名称は、武術と芸能で共有されるものもあった。『三寶太監西洋記』には、武芸の格闘と大道の見世物芸で、招式を列挙する類似の場面がある。

①格闘描写―拳法の招式

那個一拳、打個喜雀爭巢。這個一拳、打個烏鴉撲食。那個一拳、打個滿面花。這個一拳、打個萃地錦。那個一拳、打個金雞獨立。這個一拳、打個伏虎側身。那個一拳、打個高四平。這個一拳、打個中四平。那個一拳、打個井欄四平。這個一拳、打個碓臼四平。那個一拳、打個虎抱頭。這個一拳、打個龍獻爪。那個一拳、打個順鸞肘。這個一拳、打個拗鸞肘。那個一拳、打個當頭抱。這個一拳、打個側身挨。那個一拳、打個閃弱生強。這個一拳、打個截長補短。那個一拳、打個一條鞭。這個一拳、打個七星劍。那個一拳、打個鬼蹴腳。這個一拳、打個炮連珠。那個一拳、打個下插上。這個一拳、打個上驚下。那個一拳、打個探腳虛。這個一拳、打個探馬快。那個一拳、打個滿天星。這個一拳、打個抓地虎。那個一拳、打個火燄攢心。這個一拳、打個撒花蓋頂。(『三寶太監西洋記』第五十七回)

傍線部が招式である。このうち、二重傍線部「金雞獨立」「井欄四平」「順鸞肘」「拗鸞肘」「當頭抱」「一條鞭」「七星劍」「鬼蹴腳」は、明・茅元儀撰『武備志』巻九十一陣練制練の項に、同様の招式が見られ、武術の招式として用いられていたことがわかる。「七星劍」は、『武備志』では「七星拳」となっており、拳法の型としては「拳」とすべきか。また、「中四平」「高四平」「井蘭四平」は、明・戚継光『紀效新書』の「拳経捷要」に見える。

②軽業の描写―竿軽業の芸

只見人叢裡面、又是一個撮摶戲兒的。今番又是個甚麽摶戲？這個摶戲、名字叫做弄高竿的…（中略）…先只把前面兩隻蹄子踏著竿子頭上、把後面兩隻蹄子懸在竿子底下。牽羊的站著下面拍一掌、喝聲道「燕雙飛！」那只羊在上頭、就把那後面兩隻蹄子筆聿直伸起來、舞了幾舞、做個燕雙飛。下面拍一掌、喝聲道「鶯百囀！」上面就把個文身懸下來、沿著竿子四周圍打一蕩磨、磨轉做個鶯百囀。下面拍一掌、喝聲道「左插花！」上面就縮了右腳、單伸著左腳舞兒舞兒、做個左插花。下面拍一掌、喝聲道「右插花！」上面就縮了左腳、單伸著右腳舞幾舞兒、做個右插花。下面拍一掌、喝聲道「倒栽蔥！」上面平白地就掀起兩隻蹄子來、頭朝下、尾巴朝上、做個倒栽蔥。下面拍一掌、喝聲道「擎天柱！」上面就換著後兩隻蹄子、站在竿子上、把前兩隻蹄子雙雙的朝著天、做個擎天柱。下面拍一掌喝聲道「金雞獨立！」上面就縮了三隻蹄子、止仲著一隻蹄子、直挺挺的站在竿子上、做個金雞獨立。下面拍一掌、喝聲道「枯樹盤根！」上面就收了四隻蹄子、低了頭、倒了尾巴、眠在竿子頭、上盤做一坨、、做個枯樹盤根。下面拍一掌、喝聲道「仰天笑！」上面就一轂碌翻轉身子來、把脊梁骨黏著竿子上、把四隻蹄子對著天、口裡咩咩叫、

做個仰天笑。下面拍一掌、喝聲道「一窩弓！」上面又一轂碌爬將起來、把四隻蹄子站在竿子上、把脊梁骨彈弓一般的弓起來、做個一窩弓。下面拍一掌、喝聲道「雪花蓋頂！」上面就平空的跳將起去、離著竿子頭上有二三尺之遠、旋旋轉轉、旋一個不了、轉一個不休、做個雪花蓋頂。下面又是拍一掌、喝聲道「平地一聲雷！」上面就撲通的一聲響、一下子就弔到竿子頭上來。下面一聲鑼、一聲鼓、應一個恰好、做個平地一聲雷。（『三寶太監西洋記』第七十九回）

傍線部が技の名称である。この描写では演じ手は、大声で技の名を叫び、観衆にアピールする。竿の上で繰り広げられる数々の軽業芸のうち、「金雞獨立」の型は①拳法の招式名にも見られる。これは片足立ちの型であり、練武場にせよ、民間の大道芸にせよ、武芸と芸能が混在して演じられていれば、類似の身体技に借用されるのはもっともなことであろう。

また、明・程宗猷撰『少林棍法』巻上には「金雞獨立」「枯樹盤根」の招式名が見られ、明・馮夢龍編『警世通言』巻四十では、彭祖と擎龍の格闘場面において、

又好一個彭君上殺個雪花蓋頂、戰住狂蜂下、殺個枯樹盤根、戰住長蛇中、殺個鷂子翻身、抵住擎龍。

と、招式が繰り出されるが、「雪花蓋頂」「枯樹盤根」は②の竿軽業の芸の中にも見られる。一方、「鷂子翻身」であるが、前出の明・田汝成撰『西湖遊覧志餘』巻二十に、竿軽業の記述があり、その技に「鷂子翻身」「金鷄獨立」「鍾馗抹額」「玉兎搗藥」の名称が見える。[一〇]

このように、武芸の招式と軽業の伎芸の名称は共有されているものが、まま見られるのである。明代に前出の『武備志』や『少林棍法』のような武芸書の出版が増加したことは、武芸の招式が白話小説の格闘描写に繰り込まれる背景になったであろうが、加えて、そもそも武芸と軽業が演武場や廟会で混在して演じられるという両者のボーダレスなパフォーマンス性も、招式の相互借用や普及の大きな原動力となったと考えられる。『三寶太監西洋記』の描写に限って言えば、①の拳法の格闘描写は招式名称が列挙されるのみであるのに対して、②の竿軽業の描写は個々の動作や上演の有様が具体的に描かれており、拳法描写の方は紙上の知識、竿軽業の方は実際の見聞がもとになっているのではないか。竿軽業は漢代の画像石にも見られ、唐代には「尋橦」と称されて、詩にも詠まれた人気の軽業であった。[一一]前掲『西湖遊覧志餘』をはじめとする雑記、小説の描写を見ても、明代に至るもその流行が衰えていないことがわかる。ちなみに「金鷄獨立」や「鷂子翻身」は京劇のポピュラーな武技の身段（動作）でもある。

また、「走解」「走驃騎」と称される馬上の曲乗りや騎射も、とりわけ官員に人気であった。[一二]明の郭勛が編纂した『雍熙樂府』には、「走驃騎」を題材とする散曲が少なからず収録されているが、その描写にも「金雞獨立」「夜叉探海」などの招式が見られる。

○越調・鬬鵪鶉・走驃騎

【黄薔薇】夜叉探海潮、倒卷簾懸高。餓虎撲食煞爪、滾綉球獅子臥倒。耿恭拜井把香燒、五鬼鬧判亂揪著。歸湖的範蠡樂道逍遙、雙馬解拖著斜插柳稍、五匹馬亂爭跑。（『雍熙樂府』巻十三）

○商調・集賢賓・瑞陽走驃騎

【么】張良跨海東。夜叉探海西。有踏梯望月夜眠遲。五鬼鬧判使見識。總不如陳摶蓋被。騎鬃倒坐探烏騅。【么】英雄伍子胥。鞭伏柳盜蹠。夾槍趕鏟恰便似電光飛。三馬解往來無賽比。最險的是金鷄獨立。唐僧三藏取經回。【么】夜叉探海潮。巴山能取水。仙人指路慶雲垂。九裏山洞前拔虎尾。更有那十閑子弟。鬼牽龍緊驟定赤狻猊。（『雍熙樂府』巻十四）

曲馬の場合、「金雞獨立」は鐙もしくは鞍上に片足立ちするパフォーマンスである。「夜叉探海」は槍法の招式で、「夾槍趕鏟恰便似電光飛」との描写があることから、馬上に槍法を披露していると見てよいであろう。その他の招式の由来は未確認であるが、こうした招式の相互借用は、非言語的な身体技のイメージを言語化して共有することとなる。そこには、同時代において官と民を問わず雑多に享受されるいわゆる「百戯」の類、見世物芸としての武芸も芸能も軽業も遊戯も含めたアミューズメントの基層の非境界性が呈されるといってもよい。

四、演劇による武芸雑技の吸収

演武場は、軍隊の教練、閲兵のほか、民間の演劇にも利用された。清・張岱撰『陶庵夢憶』巻六「目蓮戯」に言う。

余蘊叔演武場搭一大臺、選徽州旌陽戯子剽輕精悍、能相撲跌打者三四十人、搬演目蓮、凡三日三夜。四圍女臺百什座、戯子獻技臺上、如度索舞絙、翻桌翻梯、觔斗蜻蜓、蹬鐔蹬臼、跳索跳圈、竄火竄劍之類、大非情理。凡天神地祇、牛頭馬面、鬼母喪門、夜叉羅刹、鋸磨鼎鑊、刀山寒氷、劍樹森羅、鐵城血澥、一似呉道子「地嶽變相」、爲之費紙札者萬錢、人心惴惴、燈下面皆鬼色。戯中套數、如「招五方惡鬼」「劉氏逃棚」等劇、萬餘人齊聲吶喊。熊太守謂是海寇卒至、驚起、差衙官偵問、余叔自往復之、乃安。

私の叔父張爾蘊[二三]は、演武場に大掛かりな戯台を設け、徽州旌陽の役者で敏捷剽悍な者、格闘に長けた者を三、四十人選んで、三日三晩目連戯を上演した。周囲の女桟敷は百十座、役者は舞台で芸を披露する。綱渡りや卓乗り、はしご乗り、トンボ返り、足技の樽回し、縄跳び、輪くぐり、火くぐり、剣くぐりのような類で、荒唐無稽極まりない。およそ天地神祇、牛頭馬頭、鬼母凶神、夜叉羅刹、鋸地獄に釜地獄、刀の山は冷え冷えと、剣がびっしりと立ち並び、地獄の城門は血にまみれ、呉道子の「地嶽變相」にそっくりである。これのために萬銭を費やしたのだ。人々は恐れおののき、燈下に皆幽霊のような顔色である。劇中の套数は、「招五方惡鬼」「劉氏逃棚」などの劇で、一万余人が一斉にどよめく。これに熊太守は海賊が襲ってきたかと驚き、役人を探索に遣わした。私の叔父が釈明に赴き、ようやく落ち

着いたのである。

ここには、目連戯の上演に軽業、演武等の身体技が組み込まれていることがわかる。「選徽州旌陽戯子剽輕精悍、能相撲跌打者」というように、役者の中には、歌や演技の所作だけでなく、軽業や立ち回りの得意な者が少なからずいたのである。『陶庵夢憶』の記載を見る限り、この演出は大いに観衆を沸かせたようである。

また、明・無名氏『四賢記』第十五齣「招納」（六十種曲本）には、演武の場面がある。『四賢記』は、元代の棒胡の反乱を時代背景とし、それに巻き込まれた烏古孫澤一家の悲歓離合を描いたものである。第十五齣は浄扮する棒胡が、武芸自慢の人材を募集する場面である。

〔淨〕小廝收了書畫。快備酒飯。二位姓甚名誰。有何本事。〔末〕小人弓伯長。武藝頗精。耍拳爲最。〔丑〕小人烏六禿。飛梁走柱。撮弄尤佳。〔淨〕請各試演一回。〔末〕待我來。〔打拳介〕【駐馬聽】掌擦拳摩。鷂子翻身似擲梭。打出雙龍入海。五虎搜山。八臂降魔。〔作使刀介〕這三停刀法白猿拖。〔使棍介〕那連珠棍勢猱獅舞。〔淨〕好本事。〔末〕武藝如何。只止見烟塵抖亂。滿天星火。〔丑做撮弄介〕【前腔】急急鳴鑼。三套圈兒變幻多。撮出金蓮獨歩。一斗黄粱。半疋紅羅。再撮出普陀山上白鸚哥。又撮出蓬萊山頂神仙果。〔淨〕妙妙。撮得乾淨。〔丑〕撮弄如何。欲做那飛梁走柱。怕人瞧破。

〔淨〕小者は書画を片付けて、早く酒と飯を用意しろ。お二方のお名前はなんと言われる。何が得意かな。

〔末〕手前は弓伯長、武芸に精通し、拳法を最も得意といたす。

〔丑〕手前は烏六禿、梁を飛び柱を駆け、とりわけ手妻に長けております。

〔淨〕ではお手並み拝見いたそう。

〔末〕まずは手前が。〔拳をふるうしぐさ〕

【駐馬聴】手をさすり拳をなでる。鷂子翻身すれば梭を投げるが如く素早く、雙龍入海、五虎搜山、八臂降魔の型を打ち出す。〔刀をふるうしぐさ〕この三停刀（薙刀に似た大刀）の刀法は白猿拖の型。〔棍を使うしぐさ〕かの連珠棍の型は獅子が舞うよう。

〔淨〕見事な腕前。

〔末〕武芸はいかがかといえば、ただ塵煙が乱れ舞い、満天のきら星を見るばかり。

〔丑が奇術をするしぐさ〕

【前腔】せわしなく銅鑼が鳴り響き、三重の輪は色々と変幻いたしまする。取り出だしますは、金蓮独歩、一斗黄粱、半疋紅羅とございい。つぎに取り出だしますは普陀山上の白鸚哥、さらには蓬萊山頂の神仙果。

〔淨〕見事見事、手際がいい。

〔丑〕手妻はいかがかといえば、かの飛梁走柱の技をやりたけれども、人に見破られるのがこわい。

末扮する弓伯長は武芸の達人という設定で、拳法、刀法、棍法を披露し、丑扮する烏六禿は滑稽担当の役柄よろしく、「撮弄（奇術）」で煙に巻く。即ち、武芸と軽業手品が並ぶ。いかにも前出の『元史』

にいう民間の正業につかぬ無頼の体である。

ここで本作品を取り上げたのは、卜書きや曲辞との関わりから見て、『陶庵夢憶』の「目蓮戯」のように、演武や手品のたぐいが劇中の演技に組み込まれていた、あるいは組み込んで上演することを想定していた、と見られるからである。

明代伝奇にも英雄の戦記ものは少なからずあり、明の熹宗も岳飛もののような武戯を好んだ[四]という。戦闘の場面ではそれなりに殺陣が披露されていた可能性はあるが、歌唱を重視した伝奇の場合、曲辞で十分に戦闘の有様が表現されてしまうので、劇本を見る限り、非言語的な身体技として具体的にどのような殺陣演武が行なわれていたのか、よくわからない。その点、『四賢記』の場合は、具体的な動作が曲辞と合体しており、民間の雑技が直接的に演劇に吸収されるさまが反映されているといえるのではないだろうか。

五、おわりに

民間における大道武芸は、雑戯の一種として軽業や手品、芝居に混じって、節日や廟会で披露された。教坊の百戯も同様で、武技が含まれていた。また、演武場で披露される演武は多分にパフォーマンスの様相があり、「呑刀走索之徒」すなわち大道芸人が加わることもあった。様々な技の型―招式が、芸能と武術の間で共有されつつ、武術の体系化と共に多様化し、格闘描写にも影響した。このように芸能とボーダーレスに見世物として広く受容された武芸は、演劇のパフォーマンスに吸収され、武芸のたしなみのある役者が芝居の中でその技芸を披露した。大量の才子佳人劇が創作された明清の演劇は、文戯の脚本の文学性に文人の関心が集中しているが、実際の上演では武戯へのニーズは確実にあり、その基層には無位無官、無名の武芸者、芸人が多数演じ手として、創り手として関わっている。ちなみに、こうした武芸のパフォーマンス性は、現代のアミューズメントシーンで観客を前に披露される武術ショーのあり方とも無縁ではない。

ただし、本報告では、そうした概要を述べるに止まったため、身体技から見た武戯形成のより詳細な実態の解明は今後の課題としたい。

《注》

(一)「二月八日為桐川張王生辰、霍山行宮朝拜、極盛百戯競集：如緋緑社雑劇、齊雲社蹴毬、遏雲社唱賺、同文社要詞、角觝社相撲、清音社清樂錦、標社射弩、錦體社花繡、英畧社使棒、雄辯社小説、翠錦社行院、繪革社影戯、浄髪社梳剃、律華社吟叫、雲機社撮弄。」

(二)「清明從冬至數至一百五日即其節也。前兩日謂之寒食、人家挿柳滿簷、青蒨可愛、男女亦咸戴之。諺云清明不戴柳、紅顔成皓首。是日傾城上塚南北兩山之間、車馬闐集、而酒尊食罍、山家村店、享餕遨遊、或張幕藉草、並舫隨波、日暮忘返。蘸堤一帶、桃柳陰濃、紅翠間錯、走索、驃騎、飛錢、抛鈸、踢木、撒沙、呑刀、吐火、躍圈、觔斗、舞盤及諸色禽虫之戯、紛然叢集。」

(三)「魯智深只道賺他托地跳退數步、把禪杖收住、定睛看時、火把下認得不是別人、却是江湖上使鎗棒賣藥的教頭打虎將李忠。」（明容與堂刻本『李卓吾先生批評忠義水滸傳』卷之五）

(四)「只是沒有盤纏、心生一計、自小學得些鎗棒拳法在身。那時抓縛衣袖、

做箇把勢模樣、逢着馬頭聚處、使幾路空拳、將這傘權為鎗棒、撇箇架子一般。有人喝采賞發幾文錢、將就買些酒飯用度。」（明天許齋刻本『古今小説』巻三十九）

（五）「老夫婦年紀將六十、只有一個女兒小名碧蓮、年方一十六歲、自幼從師讀書文字驚人。又從父母舅習學一身武藝、槍刀劍戟無所不通。老夫婦愛如珍寶、不肯輕易許人。又且這碧蓮立志不嫁庸俗、必要個英雄豪傑、方遂其願所以。今日這老夫婦同著巴龍、巴虎、巴豹、巴彪兄弟四人、帶著女兒、以把戲為名、周遊各府州縣。實為擇婿出來、有幾年的光景、並無一個中女兒之意。」（清道光刊本『緑牡丹』第三回）

（六）「民間子弟不務生業、輒於城市坊鎮演唱詞話、教習雜戲、聚衆淫謔、並禁治之。諸弄禽蛇、傀儡、藏擫、撇鈸、倒花錢、擊魚鼓、惑人集衆、以賣僞藥者、禁之。違者重罪之。諸棄本逐末、習用角觝之戲、學攻刺之術者、師弟子並杖七十七。」

（七）ただし、本文の主旨は、戦争においては一人一殺の馬術や弓術より、兵法が重要であって、こうした（民間の無頼の）輩は兵法を全く知らないため、武臣の子弟にはまず「武経七書」を習熟させ、武芸と兵法の両方を試験して登用すべき、というものである。

（八）「今教場之選練、演成局套、如某某者、始以呑刀走索之徒充選、聞有榆關之調、遂挾衆囂凌、甘心斥逐。前日鬬奇弄捷之技巧安在也。」（明・沈國元撰『兩朝從信録』巻十三、明崇禎刻本）

（九）太宗曰：「朕以卿未建奇功、暫留皇城居住、候下河東、則當重用於卿。」贊謝恩而退。太宗宣入八王、謂之曰：「朕以贊新將、未見其武藝、今欲試觀之、汝有何策？」八王奏曰：「陛下欲觀贊之武藝、此事極易、當效先朝御果園故事、便見其能也。」太宗曰：「單雄信之士、軍中或可有；小秦王之類、難為其人也。」八王曰：「臣願裝作小秦王；使呼延贊為尉遲敬德；惟單雄信、陛下千百萬軍中選之。」（明世德堂本『北宋志傳』第六回）

（一〇）「三月三日俗傳爲北極佑聖眞君生辰、佑聖觀中修崇醮事。士女拈香、亦有就家啓醮、酌水獻花者。是日觀中有雀竿之戲。其法樹長竿于庭、高可三丈、一人攀緑而上、舞蹈其顚、盤旋上下。有鷂子翻身、金鷄獨立、鍾馗抹額、玉兎搗藥之類、變態多方。觀者目瞪神驚、汗流浹背。而爲此技者如蝶拍鴉翻、蓬蓬然自若也。」

（一一）岡﨑由美「唐代豪侠小説と散楽百戯」（『日本中国学会創立五十年記念論文集』、汲古書院、一九九八）

（一二）「京師及邊鎮最重午節、至今各邊、是日俱射柳較勝。士卒命中者、將帥次第賞齎。京師惟天壇遊人最勝、連錢障泥、聯鏢飛鞚、豪門大估之外、則中官輩競以騎射為娛、蓋皆賜沐請假而出者。内廷自龍舟之外、則修射柳故事、其名曰「走驃騎」。蓋沿金元之俗、命御馬監勇士馳馬走解、不過御前一逞迅捷而已。惟閣部大老、及經筵日講詞臣、得拜川扇香藥諸賜、視他令節獨優。今上初年猶然、自内操事興、至甲申歲之午日、預選少年強壯内侍三千名、俱先嫻習騎射、至期彎弧騁轡、云錦成群、有京營所不逮者。上大悅、黨賚二萬餘金。」（明沈徳符『萬暦野獲編』巻二「列朝二端陽」）

（一三）張岱『琅嬛文集』巻四「家傳」に「吾仲叔葆生、三叔爾含、七叔爾蘊也」とあり、「蘊叔」とは、張岱の七叔、張爾蘊を指す。

（一四）「先帝最好武戲、于懋勤殿陞座、多點岳武穆戲文、至瘋和尚罵秦檜處、逆賢常避而不視、左右多笑之。」（明・劉若愚『酌中志』巻十六）